論　文

卓球バレー実施者のスポーツ意識に関する一考察
―車椅子バスケットボール実施者との比較から―

眞﨑奈津美・福本　敏雄・山田　力也

（西九州大学）

（平成29年10月31日受理）

A study of Sports Awareness in Takkyu Volley Players
−In comparison with wheelchair basketball players−

Natsumi MASAKI, Toshio FUKUMOTO, Rikiya YAMADA

Nishikyushu University

（Accepted: October 31, 2017）

Abstract

The aim of this study is to clarify sports awareness in players of takkyu volley, which has recently become popular as one of the universal sports, and, based on the results, to discuss the possible contribution of universal sports (=takkyu volley) to an increase in the participation of people with disabilities in sports. In this study, a questionnaire survey was carried out with questions on the frequency of playing sports (any sport), purpose of playing sports, and images of and expectations from three different sports (universal sports/takkyu volley/wheelchair basketball) among 148 takkyu volley players and 62 wheelchair basketball players, and the results were compared.

The main results are as follows. Takkyu volley players and wheelchair basketball players played sports to have fun and to achieve victory, respectively. The players of both types of sports had similar images of takkyu volley and universal sports; however, those images were different from their images of wheelchair basketball. Although there was no significant difference in the expectations from takkyu volley and wheelchair basketball between takkyu volley players and wheelchair basketball players, takkyu volley players expected to relax their body and mind while wheelchair basketball players expected to improve their skills by playing universal sports. Takkyu volley players feel there is value in enjoying sports lightly while wheelchair basketball players find value for obtaining something by playing sports.

The above results indicate that widespread implementation of universal sports that have similar characteristics (e.g., image) to takkyu volley may lead to an increase in the participation of people with disabilities in sports.

キーワード：卓球バレー、ユニバーサルスポーツ、スポーツ意識、スポーツイメージ、スポーツ価値意識

Key words：takkyu volley, universal sports, sports awareness, image of sports, sports value awareness

Ⅰ．はじめに

わが国では、2011年に50年ぶりの全面改定となったスポーツ基本法[1]の制定により、障がいのある人が行うスポーツ（以下、障がい者スポーツとする）の普及・推進が明文化されたことや、2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定したことなどによって、障がい者スポーツへの関心が高まってきている。

特にパラリンピックや世界レベルの大会、ジャパンパラリンピック大会や全国障害者スポーツ大会（以下、全スポ大会とする）など、国内外で活躍するトップアスリートや特定の人が関わるそれらのスポーツ環境が、整備・充実されつつある。しかし、上述したスポーツ基本法には、地域レベルでの障がい者スポーツ推進についても言及されていることから、この点においても、今後どのように環境の整備・充実が図られていくかが注目されている。

笹川スポーツ財団の「地域における障害者スポーツ普及促進事業（障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究報告書（2016）」[2]によると、健常者の年１回以上の運動・スポーツ実施者の割合73.6％に対し、障がい児・者の割合は42.5％となっており、障がい児・者のスポーツ実施率の低さが顕著である。このことは、共生を目指す社会を謳い、一生涯のスポーツとして健常者と障がいのある人が一緒に楽しむことのできるスポーツのあり方が問われる中においては、見過ごすことのできない問題であるともいえよう。

障がい者スポーツの振興についても、「第２期スポーツ基本計画（中間報告）」（スポーツ庁2016）[3]のなかであげられており、現状19.2％（若年層（７～19歳）31.5％）である障がいのある人の週１回以上のスポーツ実施率を、40％（若年層（７～19歳）は50％程度）に引き上げることが明文化されている。

一方、近年では、ルールや用具の工夫により、体力の問題や障がいへの適応、そしてスポーツの苦手意識を感じずに参加できるスポーツも考案されている。代表種目としては、重度障がい者が選手として出場するパラリンピック正式競技種目の「ボッチャ」や、全スポ大会のオープン競技としてここ数年の実施が多い「卓球バレー」などがある。

これらは、障がい児・者に限らず、誰もが一緒に楽しめるスポーツ、総称して「ユニバーサルスポーツ」と呼ばれており、卓球バレーについては堀川（2015）[4]が、障がい者スポーツの一競技としてではなく、ユニバーサルスポーツの代表格として幅広い年齢層を対象とし普及していく必要性があると述べている。

この卓球バレーは、2008年に大分県で開催された第８回全スポ大会のオープン競技に採用されたことを機に、日本卓球バレー連盟が立ち上がり、2017年９月現在、全国で18の協会が組織されている[5]。また、2016年岩手県で開催された第16回全スポ大会でも５回目のオープン競技として実施され、そこでは「究極のユニバーサルスポーツ」として紹介された。

さらに、スポーツ庁によって報告された「地域における障害者スポーツの普及促進について」[6]では、障がいのある人と障がいのない人が一緒に行うスポーツ活動の推進に役立つ種目として、卓球バレーが例にあげられている。その他にもボッチャやフライングディスクがあげられており、これらの競技用具は比較的安価で手に入るため、関係する障がい者スポーツ団体や地域のスポーツ施設等において広く整備されることが期待されている。

このように、障がい者スポーツの普及促進においては、障がいの有無に関係なく誰もが参加できるスポーツ、いわばユニバーサルスポーツ的特徴を持つスポーツ（種目）こそが、障がいのある人のスポーツ参加拡大に貢献すると考えられる。

そこで本研究では、近年「究極のユニバーサルスポーツ」として広く普及している卓球バレーに焦点をあて、その実施者が実際にどのような意識で卓球バレーを行っているのか、その特徴を明らかにすることを目的とする。そしてその結果から、ユニバーサルスポーツ（＝卓球バレー）が、障がいのある人のスポーツ参加拡大に及ぼす可能性についても検討してみたい。

Ⅱ．ユニバーサルスポーツとは

近年、誰にでもできるスポーツとしてユニバーサルスポーツという言葉が広がりつつある。これらは言葉の通り、ユニバーサルデザインの概念が表出されたスポーツのことである。このユニバーサルデザインについては、ロナルド・メイス（1985）[7]が以下の通り７原則を提唱している。

①どんな人でも公平に使えること（公平な利用）、②使う上で柔軟性があること（利用における柔軟性）、③使い方が簡単であること（単純で直感的な利用）、④必要な情報がすぐに分かること（認知できる情報）、⑤うっかりミスを許容できること（失敗に対する寛大さ）、⑥身体への過度な負担を必要としないこと（少ない身体的な努力）、⑦アクセスや利用のための十分な大きさと空間が確保されていること（接近や利用のためのサイズと空間）。

これらをスポーツに置き換えると、誰もが参加することができ、ルールが簡単で分かりやすく、身体的負担の少ない軽スポーツであり、さらに、どこででもできるスポーツといえる。つまり、ユニバーサルスポーツは、年齢、性別、障がいの有無などに関係なく、誰もが一緒に

楽しめるスポーツであるといえる。

Ⅲ．調査の概要

1．調査目的

本調査では、ユニバーサルスポーツのひとつといわれている、卓球バレー実施者のスポーツ意識を明らかにすることを目的とする。そのために、卓球バレーと、パラリンピックの正式競技種目であり障がい者スポーツの花形とも言われている車椅子バスケットボール（以下、車椅子バスケとする）両選手の実施目的、ユニバーサルスポーツ・卓球バレー・車椅子バスケそれぞれのスポーツに対するイメージと期待すること、およびスポーツに対する価値意識について比較検討する（図１）。

2．調査内容

両選手の実施スポーツに関する基本的項目と、卓球バレー、車椅子バスケ、ユニバーサルスポーツそれぞれに対する質問を行った。

まず、実施スポーツに関する基本的項目として、実施頻度、実施目的、競技レベル、スポーツに対する価値意識についての設問を設定した。

そして、卓球バレー、車椅子バスケ、ユニバーサルスポーツそれぞれに対する質問として、実施目的や期待すること、そのスポーツに対するイメージについて設定した。イメージについては、「弱い－強い」「単純－複雑」「簡単－難しい」「ゆっくり－素早い」「やわらかい（ソフト）－かたい（ハード）」「暗い－明るい」「面白くない－面白い」「黒－白」「重度－軽度」「危険－安全」「遊び－スポーツ」「新しい－伝統的」「楽しさ－競争（勝敗）」「地味－華やか」「疲れにくい－疲れやすい」「限定的－開放的」「費用がかからない－費用がかかる」「束縛－自由」「大人しい－激しい」「個人－集団」の20項目を設定し、右項目のイメージが強いほど「５」、左項目のイメージが強いほど「１」という５段階法を用いた。これらの項目を設定するにあたっては、秋政ら（2010）[8]が大学生の車いすダンスに関するイメージ調査に用いた項目を参考にした。

3．調査期間・方法・対象

2016年６月４日開催の「萩・卓球バレー交流大会」への出場選手148名と、2016年６月11、12日開催の「全国障害者スポーツ大会車椅子バスケットボール競技九州ブロック予選会」への出場選手78名を対象に自記式の質問紙調査を行った。

回収数は、前者112名（回収率75.7％）、後者64名（回収率82.1％）、合計176名（回収率77.9％）であり、そのうち有効回答数は前者49名（有効回答率33.1％）、後者62名（有効回答率79.5％）、合計111名（有効回答率49.1％）であった。前者については、知的障がい者が多かったため、有効回答数および率が低くなっている。

なお、本調査は西九州大学の倫理委員会において承認された上で行った（承認番号 H28-１）。データ分析にはSPSS（ver.21.0）を用いた。

4．結果と考察

１）基本的属性について

今回の調査対象者は、障がいのある方本人74.8％、障がいのある方本人の意見を聞いて代理で回答された人が11.7％、健常者13.5％であった。代理で回答された人は卓球バレー選手のみであり、ほとんどが知的障がい者である。

性別は、男性73.9％、女性26.1％で男性の回答者が多く、年齢をみてみると、19歳以下3.6％、20～29歳20.7％、30～39歳22.5％、40～49歳23.4％、50～59歳16.2％、60～64歳2.7％、65～69歳8.1％、70～74歳0.9％、75歳 以上1.8％であった。

２）スポーツ全般について

⑴　実施頻度について

ここでは、過去１年間の運動・スポーツの実施頻度について質問を行った。結果、卓球バレー選手は、週３日

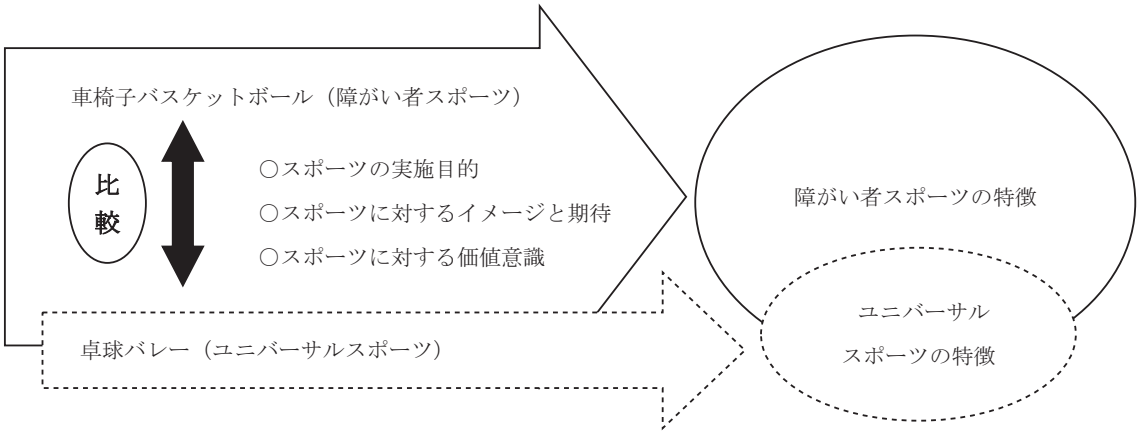

図１　調査枠組みの概要

以上2.0%、週１～２日40.8%、月１～３日14.3%、３ヶ月に１～２日6.1%、年１～３日10.2%、分からない22.4%、無回答4.1%であり、車椅子バスケ選手は、週３日以上37.1%、週１～２日48.4%、月１～３日11.3%、３ヶ月に１～２日3.2%、年１～３日0.0%、分からない0.0%、無回答0.0%であった。

これらの結果より、車椅子バスケ選手の方が卓球バレー選手に比べ、日頃の運動・スポーツ実施頻度が高いことが明らかになった。

⑵　実施目的について

スポーツ全般における実施目的は、卓球バレー選手が、健康維持・増進のため16.3%、気分転換・ストレス解消のため10.2%、楽しみのため28.6%、友人・家族との交流のため8.2%、健常者または障がいのある人との交流のため10.2%、体型維持・改善のため0.0%、リハビリテーションのため10.2%、目標・記録への挑戦のため0.0%、その他0.0%、無回答14.3%であり、車椅子バスケ選手は、健康維持・増進のため29.0%、気分転換・ストレス解消のため9.7%、楽しみのため21.0%、友人・家族との交流のため1.6%、健常者または障がいのある人との交流のため3.2%、体型維持・改善のため3.2%、リハビリテーションのため3.2%、目標・記録への挑戦のため16.1%、その他4.8%、無回答8.1%であった。

種目別に上位３項目をそれぞれあげると、卓球バレー選手は、楽しみのため、健康維持・増進のため、健常者（障がいのある人）との交流のため、リハビリテーションのため、車椅子バスケ選手は、健康維持・増進のため、楽しみのため、目標・記録への挑戦のためであり、楽しみや健康維持・増進に関して両選手において共通していることが明らかになった。

⑶　競技レベルについて

競技レベルについては、卓球バレー選手が、国際大会出場2.0%、全国大会出場20.4%、地方大会出場8.2%、県大会出場10.2%、市町村大会出場12.2%、とくになし38.8%、無回答8.2%であり、車椅子バスケ選手は、国際大会出場25.8%、全国大会出場54.8%、地方大会出場16.1%、県大会出場0.0%、市町村大会出場1.6%、とくになし1.6%、無回答0.0%であった。

この結果より、卓球バレー選手に比べ、車椅子バスケ選手の方が比較的競技レベルが高いことが明らかになった。

⑷　スポーツ価値意識について

スポーツ価値意識については、上杉（1990）[9]が構築したスポーツ価値意識の４類型を用いた。これに関しては詳しく後述する。

３）卓球バレー・車椅子バスケの実施目的について

卓球バレー選手の卓球バレー実施目的は、勝つため（競技志向）12.5%、楽しむため（楽しさ志向）54.2%、健康のため（健康志向）6.3%、その他0.0%、無回答27.1%であり、楽しさを求めて実施している選手が多い。車椅子バスケ選手の車椅子バスケ実施目的は、勝つため（競技志向）50.0%、楽しむため（楽しさ志向）33.9%、健康のため（健康志向）12.9、その他1.6.%、無回答1.6%で、勝つために実施している選手が多い。

４）スポーツに対するイメージについて

ここでは、両選手が３つのそれぞれのスポーツに対して、どのようなイメージを持っているのか、両選手間で比較検討を行った。

⑴　卓球バレーに対するイメージ

卓球バレーに対するイメージでは、「弱い－強い」（p＜.001）、「単純－複雑」（p＜.05）、「やわらかい（ソフト）－かたい（ハード）」（p＜.05）、「暗い－明るい」（p＜.01）、「面白くない－面白い」（p＜.01）、「個人－集団」（p＜.05）において有意な差が見られた（図２）。これらの項目に関しては、実際に卓球バレーを経験しているか経験していないかの違いによって差が見られたと考えられる。

また、両選手の卓球バレーに対するイメージに差があるかどうかｔ検定を行ったところ、有意差が見られた（表１）。つまり、両選手間において、卓球バレーに対する

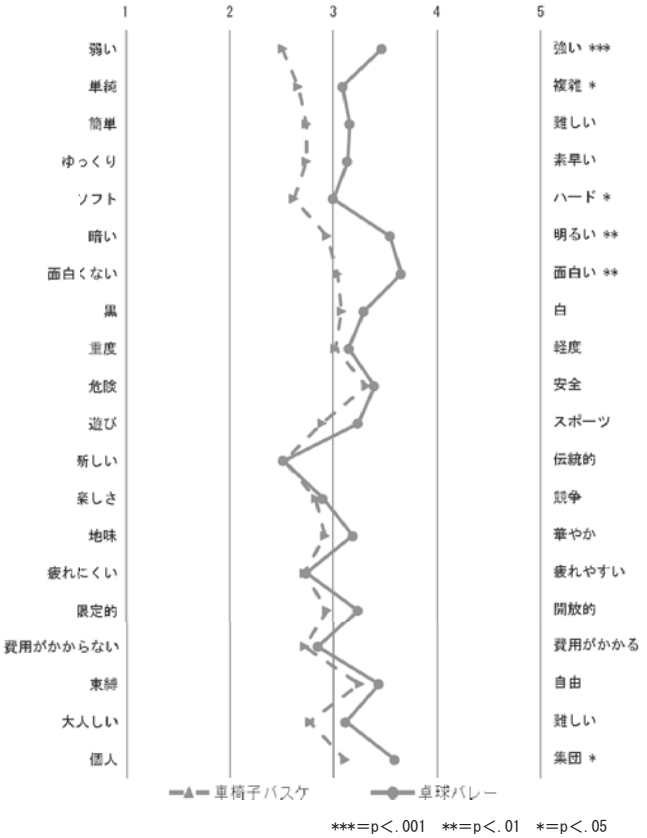

図２　卓球バレーに対するイメージ

イメージは異なる傾向にあることが示唆された。

⑵　車椅子バスケットボールに対するイメージ

車椅子バスケに対するイメージでは､｢暗い－明るい｣（p＜.05)、｢面白くない－面白い｣（p＜.001)、｢新しい－伝統的｣（p＜.001)、｢疲れにくい－疲れやすい｣（p＜.01)、｢大人しい－激しい｣（p＜.001）において有意な差が見られた（図３）。

「暗い－明るい」｢面白くない－面白い｣｢疲れにくい－疲れやすい」の項目に関しては、卓球バレーに対するイメージでも述べたように、実際に車椅子バスケを経験しているか経験していないかの違いによって差が見られたと考えられる。この件については、安井（2010)[9]も車椅子バスケを経験することによって、｢面白い｣｢楽しい｣｢激しい｣などにおいて｢そう思う｣と考える傾向が高くなることを報告している。

また、｢新しい－伝統的｣の項目に関しては、車椅子バスケ選手は競技歴が長い選手が多いため、伝統的なものだとイメージしている選手が多く、卓球バレー選手にとっては経験する機会がないため目新しいものだとイメージされるのだと考えられる。

次に、両選手の車椅子バスケに対するイメージに差があるかどうかｔ検定を行ったところ、有意差は見られなかった（表１）。

⑶　ユニバーサルスポーツに対するイメージ

ユニバーサルスポーツに対する両選手のイメージにおいては、全ての項目で有意差は見られなかったものの、「弱い－強い」（卓球バレー：3.33、車椅子バスケ：2.96、差：0.37）（以下同様)、｢面白くない－面白い」（3.47、3.19、差0.28)、｢個 人－集 団」（3.21、3.46、差0.25)、｢暗い－明るい」（3.50、3.27、差0.23）の順で平均値に若干の差が見られた（図４）。

このことから、ユニバーサルスポーツのひとつといわ

表１　両選手のそれぞれのスポーツに対するイメージの平均

種目	選手	合計平均値（SD）	項目別平均値（SD）	
卓球バレー	卓球バレー	64.69（8.18）	3.23（0.41）	**
	車椅子バスケ	58.56（6.83）	2.93（0.34）	
車椅子バスケ	卓球バレー	74.45（10.08）	3.72（0.50）	
	車椅子バスケ	77.28（8.82）	3.86（0.44）	
ユニバーサルスポーツ	卓球バレー	60.58（6.80）	3.03（0.34）	
	車椅子バスケ	60.88（8.13）	3.04（0.41）	

**=p＜.01

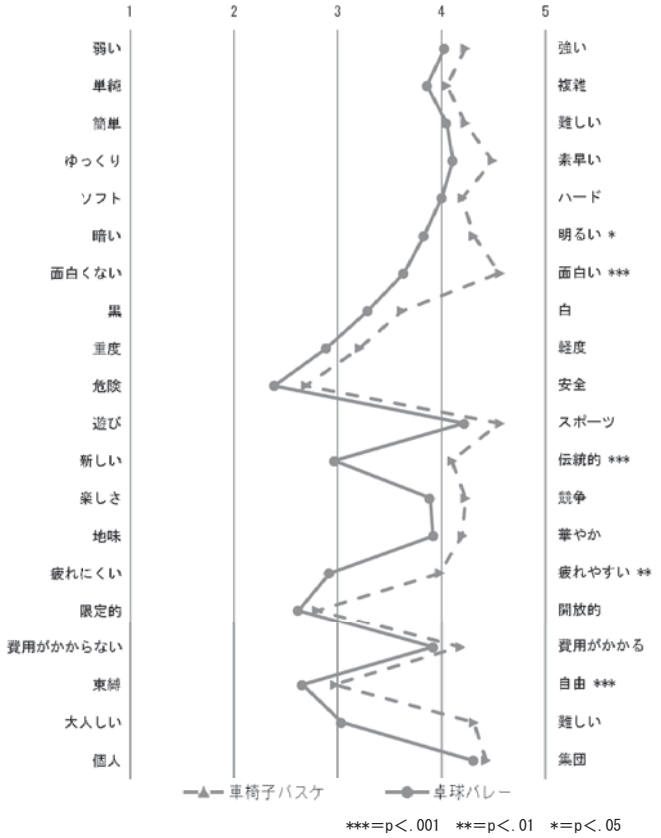

図３　車椅子バスケットボールに対するイメージ

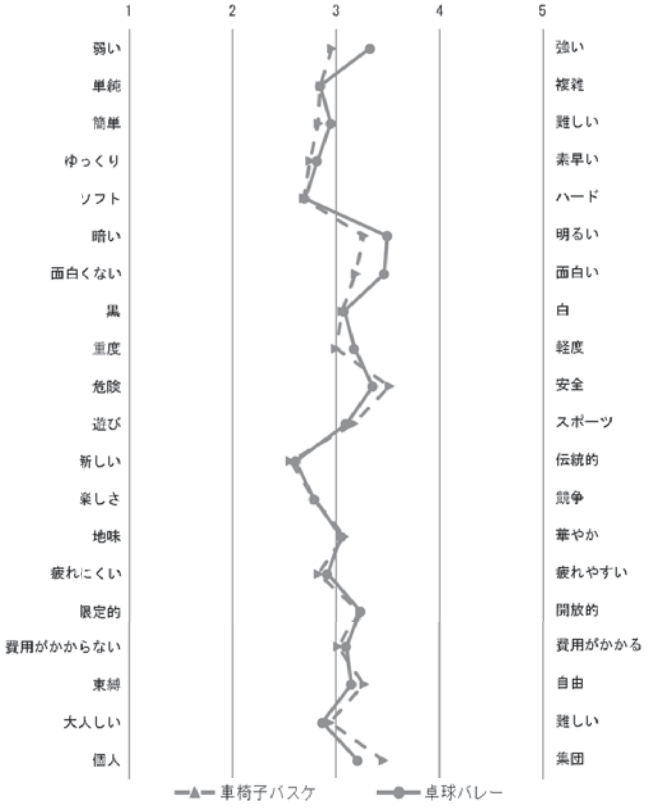

図４　ユニバーサルスポーツに対するイメージ

れている卓球バレーを実際に経験している人の方が、僅かではあるが、強くて、明るく、面白いものだとイメージしている傾向が見られた。

また、ここでも両選手のイメージに差があるかどうかt検定を行ったが、有意差は見られなかった（表１）。

⑷　３つのスポーツに対するイメージの比較

ここでは、前述してきた両選手の３つのスポーツに対するイメージをさらに比較していく。

両選手の平均値をもとに比較したものが図５である。これにより、卓球バレーとユニバーサルスポーツは似ている傾向にあるが、これら２つと車椅子バスケは異なるイメージを持っていることが明らかになった。次に、３つのスポーツに対するそれぞれ左右の項目を支持した３つの項目をあげた結果、卓球バレーとユニバーサルスポーツに対するイメージが似ている傾向にあり、それらと車椅子バスケは異なるイメージを持つ傾向があることがわかる（表２、表３）。つまり、卓球バレーはユニバーサルスポーツのイメージに近い、ひとつの競技スポーツといえるだろう。

さらに、卓球バレーと車椅子バスケに対する両選手のイメージを比較すると、「暗い－明るい」「面白くない－面白い」において共通して有意差が見られた。つまり、実際に車椅子バスケや卓球バレーを経験することで右側のイメージが強くなることが考えられる。

実際に卓球バレーと車椅子バスケに対する値に焦点を

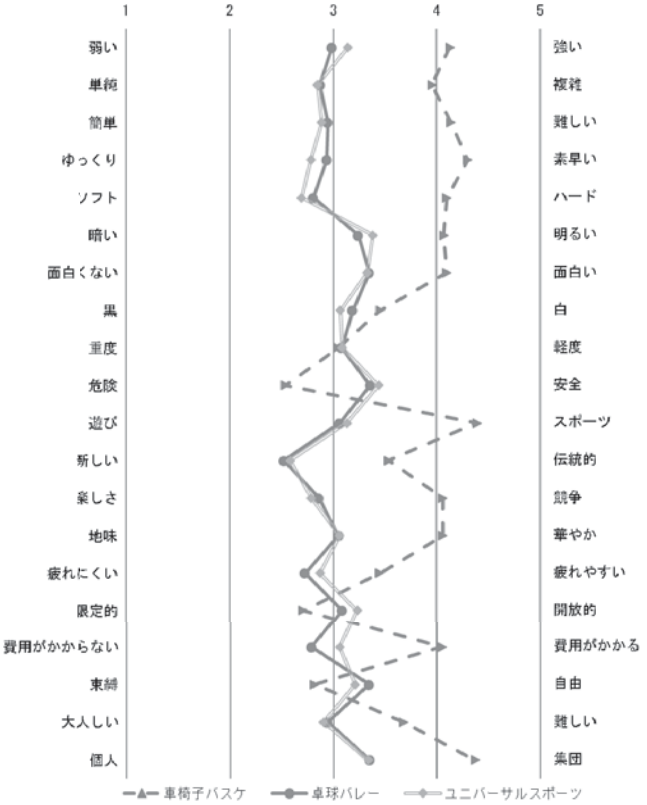

図５　３つのスポーツに対するイメージの比較
（両選手の平均値）

表２　両選手において右側を支持した３つの項目

	卓球バレー選手	車椅子バスケ選手
卓球バレー	明るい 面白い 集団	安全 自由 集団
車椅子バスケ	素早い スポーツ 集団	素早い 面白い スポーツ
ユニバーサルスポーツ	明るい 面白い 安全	明るい 安全 集団

表３　両選手において左側を支持した３つの項目

	卓球バレー選手	車椅子バスケ選手
卓球バレー	新しい 疲れにくい 費用がかからない	弱い ソフト 新しい
車椅子バスケ	危険 限定的 束縛	危険 限定的 束縛
ユニバーサルスポーツ	ソフト 新しい 楽しさ	ゆっくり ソフト 新しい

当ててみると、車椅子バスケ選手は車椅子バスケに対して、卓球バレー選手は卓球バレーに対するイメージに関して、より右側の項目を支持している（図２、図３）。このことからも、実際に経験している選手の方が全体的に右側のイメージが強くなることが示唆された。

また、両選手の３つのスポーツに対するそれぞれの平均点に焦点をあてると、両選手とも車椅子バスケに対しては高い値が見られる。しかし、卓球バレーとユニバーサルスポーツに対しては、車椅子バスケ選手の場合ほとんど差がないのに対し、卓球バレー選手では、ユニバーサルスポーツよりも卓球バレーに対して高い値（合計平均値で4.11、平均値で0.20）を示している（表１）。つまり、上述したように、実際に実施しているスポーツに対して、より高い値を示す傾向がここでも確認できた。

⑸　３つのスポーツに期待すること

次に、両選手の３つのスポーツに期待することをそれぞれ上位３項目に絞った結果、両選手に共通して、卓球バレーに対する期待は、ほぼ共通していることがわかった（表４）。車椅子バスケに対しても、大きな差は見られなかった。ユニバーサルスポーツに対しては、２項目は一致しているが、「技術力向上」に関しては差が見られた。これは、車椅子バスケ選手のスポーツに対する実施目的として、勝つためが半数を示していることが関連していると考えられる。また、全てに共通して、「交友関係を楽しむ」ことを期待していることが明らかになった。

表４　３つのスポーツに期待すること（複数回答）

	卓球バレー選手	車椅子バスケ選手
卓球バレー	交友関係を楽しむ（59.2%） 誰もが楽しめる（42.9%） 健康づくり（20.4%）	交友関係を楽しむ（35.5%） 誰もが楽しめる（30.6%） 健康づくり（19.4%）
車椅子バスケ	相手との競争（30.6%） 身体を鍛える（30.6%） 交友関係を楽しむ（22.4%）	技術力向上（58.1%） 交友関係を楽しむ（56.5%） 身体を鍛える（29.0%）
ユニバーサルスポーツ	交友関係を楽しむ（44.9%） 誰もが楽しめる（40.8%） 心身のリラックス（26.5%）	交友関係を楽しむ（41.9%） 技術力向上（27.4%） 誰もが楽しめる（25.8%）

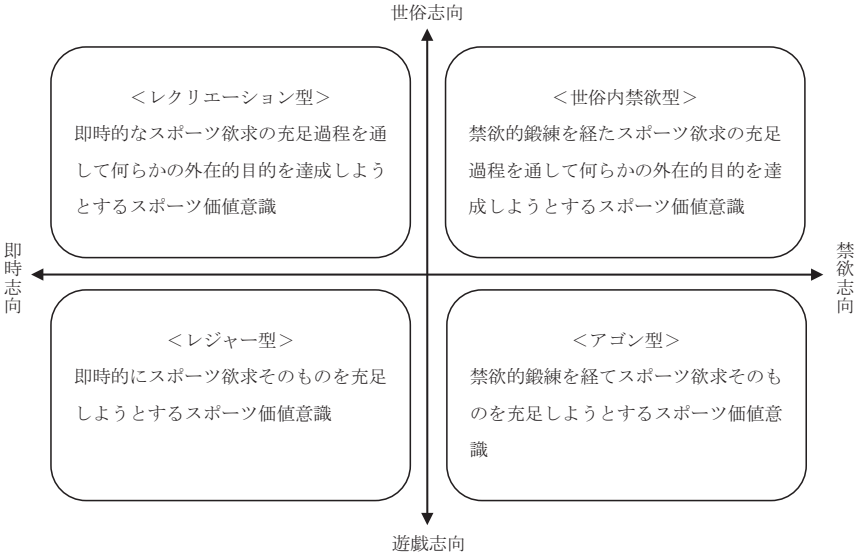

図６　スポーツ価値意識の４類型（上杉、1990）

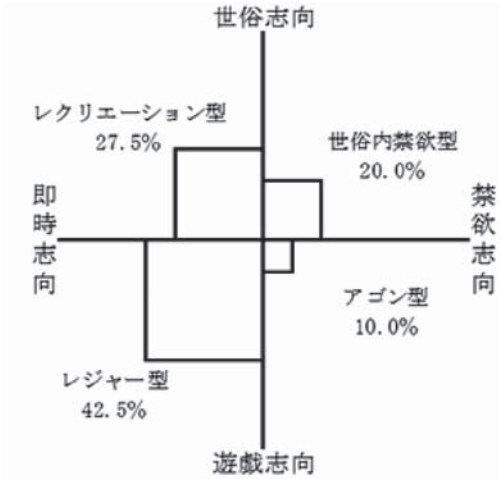

図７　卓球バレー選手のスポーツ価値意識

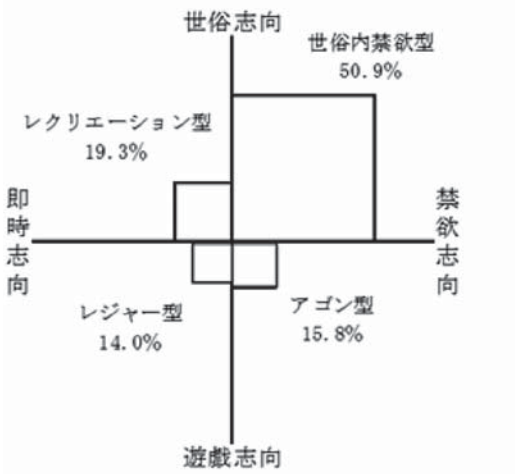

図８　車椅子バスケ選手のスポーツ価値意識

５）スポーツ価値意識について

上杉（1990）[9]が構築したスポーツ価値意識の４類型は「禁欲志向－即時志向」「世俗志向－遊戯志向」の価値志向の２軸を用いている。これら２つの軸によって、「世俗内禁欲型（禁欲志向×世俗志向）」「アゴン型（禁欲志向×遊戯志向）」「レクリエーション型（即時志向×世俗志向）」「レジャー型（即時志向×遊戯志向）」の４つに類型されている（図６）。

結果を種目別で４類型に分類すると、卓球バレー実施者は、レクリエーション型27.5%、世俗内禁欲型20.0%、レジャー型42.5%、アゴン型10.0%であり、４割以上の実施者がレジャー型である（図７）。車椅子バスケ実施者は、レクリエーション型19.3%、世俗内禁欲型50.9%、レジャー型14.0%、アゴン型15.8%で、世俗内禁欲型が半数以上を示している（図８）。

両者を比較してみると、卓球バレー実施者は、即時的

表５　スポーツ価値意識とスポーツ全般に関する基本的項目との相関関係

	種目	実施頻度	目的	競技レベル	価値意識
実施種目	1				
過去１年間の実施頻度	0.507 **	1			
運動を行う目的	−0.099	0.003	1		
競技レベル	0.553 **	0.515 **	−0.122	1	
スポーツ価値意識	0.208 *	0.214 *	−0.056	0.211 *	1

**=p＜.01　*=p＜.05

にスポーツ欲求を満たそうとするレジャー型が多く、車椅子バスケ実施者は、レジャー型とは対称的な、スポーツ欲求を満たすことにより何らかの目的を達成しようとする世俗内禁欲型が多いということが明らかになった。つまり、両選手は対称的なスポーツ価値意識をもつ傾向が示唆された。なお、両者が示す値の差には１％水準で有意差が認められた。

さらに、これらスポーツ価値意識の結果と両選手のスポーツ全般に関する基本的項目との相関関係を見てみると、実施種目、過去１年間の実施頻度（以下、実施頻度とする)、競技レベルに相関があることがわかった（表５)。

結果より、選手たちのスポーツ価値意識は、実施頻度が多いほど、競技レベルが高まり、それにともなって競技志向である世俗内禁欲型の価値意識が強くなり、実施頻度が少ないほど競技レベルにとらわれず楽しさ志向の高いレジャー型の価値意識が強まる傾向が示された。

そのような中で、卓球バレー選手がレジャー型の傾向を示したことは、競技性の強い障がい者スポーツには参加できなかった障がいのある人にとって、競技性にとらわれず気軽に障がい者スポーツに参加できる可能性を秘めているものと捉えられる。

つまり、重度な障がいを抱えているため、スポーツに参加したくても参加することのできなかった障がいのある人にとって、卓球バレーは、気軽に(即時的)にスポーツに参加できる機会が保障される可能性がある。また、卓球バレーだけでなく、そのイメージが近似しているユニバーサルスポーツとしての特徴を示す他の競技に参加することによって、障がい者スポーツへの参加拡大につながり、それを契機に社会参加へとつながる可能性があると考えられる。

Ⅳ．まとめ

本研究では、近年「究極のユニバーサルスポーツ」として普及している卓球バレーと、障がい者スポーツの花形といわれている車椅子バスケそれぞれの選手に対して、スポーツに対する意識調査を行い、その結果について考察してきた。

まず実施目的について、卓球バレー選手は楽しさを求めて実施している選手が多く、車椅子バスケ選手は、勝つために実施している選手が多いことが明らかになった。

卓球バレー・車椅子バスケ・ユニバーサルスポーツに対するイメージにおいては、卓球バレーとユニバーサルスポーツに対するイメージは似ている傾向にあり、これら２つと車椅子バスケに対するイメージは異なる傾向にあることが明らかになった。

それぞれの種目に期待することとしては、値と順位に若干の差があるものの、全てに共通して「交友関係を楽しむ」ことが上位にあげられた。また、卓球バレーに対する期待はほぼ共通しており、車椅子バスケに対する期待にも大きな差は見られなかった。しかし、ユニバーサルスポーツに対しては、卓球バレー選手が心身のリラックスを期待している反面、車椅子バスケ選手は、自らの実施種目の最上位にもあげている技術力向上に期待していることが明らかになった。このことから、これら各種目に期待することには、両選手のスポーツ実施目的が影響していることが考えられる。

さらに卓球バレー実施者のスポーツ意識の特徴を明らかにするために、スポーツ価値意識に着目し考察を行った。その結果、スポーツ価値意識において、卓球バレー選手は、即時的にスポーツ欲求を満たそうとするレジャー型が多く、車椅子バスケ選手は、スポーツ欲求を満たすことにより何らかの目的を達成しようとする世俗内禁欲型が多いということが明らかになった。つまり卓球バレー実施者は、気軽にスポーツを楽しもうとする傾向にあることが示唆された。これらの結果から、卓球バレーと車椅子バスケ両選手のスポーツ意識は、異なる傾向にあることが明らかになった。

車椅子バスケは、障がい者スポーツとはいえ、軽度障がい者など限定された人が行っている。そのため重度障がい者のように、スポーツをしたくても自分にあったレベルのスポーツが見つからず諦めざるをえないような障がいのある人にとって、スポーツに対する壁は高かったといえる。しかし卓球バレーは、本研究により、スポーツとの距離のあった障がいのある人がスポーツに参加する機会が拡大する可能性を秘めていることが示唆され

た。

さらには、卓球バレーとイメージが似ているユニバーサルスポーツの特徴をもつ他のスポーツがより多く普及されることにより、これまでスポーツに参加できていなかった障がいのある人のスポーツに対する壁を低く、もしくは取り去る可能性が期待され、今後、障がいのある人のスポーツ参加拡大へとつながることが考えられる。

しかし本研究では、卓球バレーという特定の競技種目のみに着目して研究を行ったため、卓球バレー実施者のスポーツ意識がユニバーサルスポーツの特徴を持つ種目実施者の真のスポーツ意識を示す十分な根拠にはなっていないことから、障がい者スポーツの普及と関連があるかについても信憑性に欠ける部分は否めない。そのため、今後、卓球バレーだけでなく、ボッチャやフライングディスクなどユニバーサルスポーツと言われている他の種目にも着目していく必要がある。

参考引用文献

1）文部科学省「スポーツ基本法」、http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/kihonhou/（2017年２月14日閲覧）

2）笹川スポーツ財団（2016）「地域における障害者スポーツ普及促進事業（障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究）報告書」、p. 17.

3）スポーツ庁「スポーツ基本計画第２期（中間報告）」、http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/001_index/gaiyou/1380733.htm（2017年２月14日閲覧）

4）堀川裕二（2015）「卓球バレーの普及活動について」：芝田徳造ら（2015）『すべての人が輝くみんなのスポーツを―オリンピック・パラリンピックの壁を越えて―』、田島英二、株式会社クリエイツかもがわ、pp. 115-118.

5）日本卓球バレー連盟普及委員会作成資料（2017年９月）

6）スポーツ庁（2016）「地域における障害者スポーツの普及促進について」、http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/002_index/toushin/1369121.htm（2017年２月14日閲覧）

7）The Center for Universal Design, NC State University. https://www.ncsu.edu/ncsu/design/cud/（2017年２月16日閲覧）

8）秋政邦江・小野擴男（2010）「医療系大学における「健康体育」授業への車いすダンスの導入―ユニバーサルスポーツの有効性―」、川崎医学会誌一般教養篇36、pp. 27-37.

9）上杉正幸（1990）「スポーツ価値意識のパターンとその既定要因に関する研究」、昭和62・63・元年度科学研究費補助金（一般研究Ｃ）研究成果報告書

10）安井友康（2004）「車いすバスケットボールの交流体験が障害のイメージに与える影響」、障害者スポーツ科学２（1）、pp. 25-30.